実施形態の変化を踏まえた祭りの持続可能性に関する研究
―石川県能登地域「キリコ祭り」を事例に―
Sustainability of Festival in Rural Area According to the Change in Methods
-A Case Study of 'Noto Kiriko Festival'-

岸岡智也
Tomoya Kishioka

１．背景と目的

農村地域ではさまざまな形態の祭りが伝統行事として実施されているが、人口減少、高齢化による持続性における課題を抱えている地域が数多く存在する。

石川県能登地域では「キリコ祭り」が各地で行われている。キリコ祭りは「キリコ（切籠）」と呼ばれる高さ数メートルから十数メートルの切子灯籠が神輿に供奉する行事であり、日本遺産にも登録されている。また、祭り当日には各家庭で親族や知人を料理でもてなす「ヨバレ」という文化も伝わっているが、担い手の不足によるこれら祭り文化の持続が危ぶまれている地区も存在する。

本研究ではこのキリコ祭りを対象とし、対象集落での人口分布、他出子弟等の帰省による祭り参加の状況、祭りの実施状況の変遷や住民の意識を把握することを目的とし、そこから、祭り文化の持続における要点について考察する。

２．研究方法

石川県珠洲市のＫ集落を対象とした（Fig. 1）。珠洲市は最も多くの集落でキリコ祭りが実施されている。Ｋ集落は珠洲市 2014 年のデータによれば 82 世帯 228 人、キリコ祭りは毎年決まった日に実施され、集落内の 3 地区から各１本のキリコが出される。

調査は 2019 年 4 月に、対象としたＫ集落の各世帯への戸別訪問による聞き取りにより実施した。質問項目として、現在世帯に居住している人、2018 年の祭り当日にその世帯を訪れた親族、の性別・年齢・回答者との続柄、また「ヨバレ」の実施状況、について尋ねた。また、その他祭りの継続について考えていることについても尋ねた。

Fig.1 調査対象地（石川県珠洲市）
Study Area (Suzu City, Ishikawa)

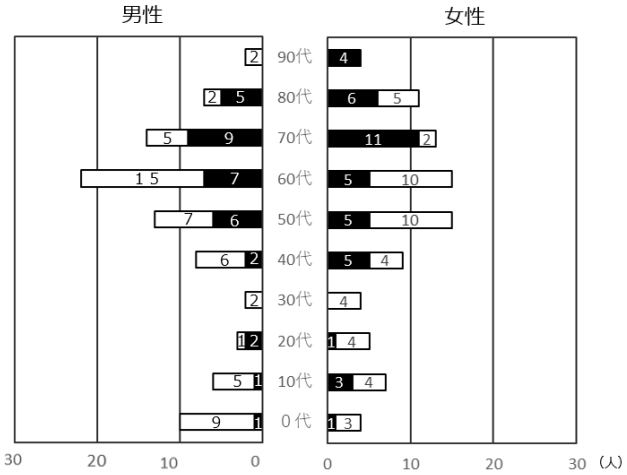
３．結果および考察

住民への予備調査の結果、全 82 世帯のうち、13 軒は廃屋、空き家であり、住民が日常的に居住しているのは 67 世帯だった。聞き取り調査の回答はそのうち 30 世帯（44.8%）から得ることができた。

【所属】金沢大学先端科学・社会共創推進機構(Organization of Frontier Science and Innovation, Kanazawa University)
【キーワード】集落計画，農村振興

①対象地における人口の構成

回答が得られた 30 世帯の状況をみると、居住者は合計で 74 人、うち 65 歳以上は 43 人（58.1%）だった。また回答が得られた世帯では 30 代の住民は 0 人であり、20 代から 40 代の人数が少なかった。また、祭り当日に親族の帰省、訪問がありヨバレを行ったのは 15 世帯（50.0%）、訪問者数は計 100 人で、市内他地区からが 58 人、県内他市町からが 32 人、県外からが 10 人だった。Fig.2 に居住者、祭り当日に訪問した親族の人口構成を示す。



■集落居住者　□祭り当日の集落外からの訪問者

Fig.2 対象集落の人口構成

Population Pyramid

②祭り実施形態の変遷と課題

対象集落では以前はキリコを担いでいたが、約 40 年前から車輪を付け引くようになり、「担ぐのには 20 人程度必要だったが、今は最低 5 人いればキリコを引くことができる」。また、約 25 年前から倉庫の設置によりキリコを解体することなく保管するようになり、祭り前後の組み立て解体に必要な人手は減少するなど、集落の人口の減少に対応して祭りの実施方法を変化させてきた。それでも、「昔は若い世代だけでできていたが、今は 70 歳まで手伝っている」ように、担い手の不足という課題が存在しており、Fig.2 に示したように、特に祭りの担い手である男性のうち 40 代以下の人数が少なく、今後も担い手不足が予想される結果となった。その中でも、盆に帰省した際に集落内の同級生と祭りの継続について話をしたことがきっかけで。33 歳の若者が東京から帰省し、高校生の時以来で祭りに参加した例があるなど、集落出身者が帰省し祭りに参加しており、集落外に転出した若い世代の参加が重要となると考えられる。

またヨバレについて、2018 年の祭り当日にヨバレを行わなかった 15 世帯のうち、普段は行っているがその年は事情あり行わなかったのが 3 世帯、1 世帯は移住者でありヨバレの習慣がなかった。以前は行っていたが現在はヨバレを行っていない 10 世帯のうち、6 世帯がこの 10 年以内にヨバレを中止していた。これらの世帯では「年をとってしなくなった」（70 代男）例や、高齢者世帯で夫婦のどちらかが亡くなって以降しなくなったという回答が多く、今後も高齢者世帯での実施の中止が予想される結果となった。

③今後の祭りの継続に対する住民の意識

珠洲市内では人手の確保のために祭りの実施日を土曜日に固定している集落も存在する。これについて対象集落の住民からは「祭りの日は動かさない方がいい」、「祭りの日を変えるよりは、キリコを出さないという選択をするのではないか」との意見が挙がった。また、「できないならできないなりに、できる形でやればいいが、祭り本来の意味が薄れてしまってはいけない」といった意見もあった。祭りの持続について議論する際には、どのような形態の変化であれば住民が受け入れられるのかを十分に議論する必要がある。